

開催地名：石川県能美市	
開催日時	令和3年12月12日（日） 10:30～12:00
開催場所	能美市防災センター
語り部	大内幸子 （宮城県仙台市）
参加者	50人
開催経緯	あらゆる生活シーンに防災があるという考えで、世代、ジャンル幅広く様々な分野の切り口から各種防災啓発を試みているところですが、過去、災害発生する頻度が少ない又は県民性からの起因か、行政に安全を委ねることによる安心感の確保により、「正常化偏見」といった心理的バイアスが生じてしまい、防災意識の醸成に繋がっていない場面が見受けられる状況となっています。災害伝承をいただくことにより、災害時のリアリティな想像を巡らし、現在の地域の姿(リスク)や生活行動と比較しながら、地域や家庭での防災のあり方を考える好機となり、災害を自分事としてとらえ、自他への知恵袋として発展していき、大きな効果が期待できるものと考えます。
内容	(1) 福住町の紹介 福住町は1,500人前後の新興住宅地で、過去の被災をきっかけに、独自の防災方式を生み出してきた。出来るだけ行政に頼らない地域力、町内あげての災害対策を行っている。まずは要支援者の名簿作成、住民全員の名簿作成（1年更新）、仙台市内外の町内会・市民グループとの災害時相互協力協定の締結、お互いにできる範囲内での支援と交流（14団体）がある。 (2) 3.11（東日本大震災発生）の1日の動きと、避難所の状況 東日本大震災の時も、炊き出しなどの訓練を行っていたので普段通りの活動ができた。安否確認を行い、公園にトイレと災害時瓦礫置き場を設置、小学校集会所でアルファ米のおにぎりづくりを行った。高砂小学校が避難所となり、500人収容の避難所に2,000人の避難者が集まった。仮設トイレは外にあって和式だったので足の不自由な高齢者には大変だった。洋式に変えてもらう要望もあげてきた。当時の避難所運営の防災マニュアルは男性主体で、女性参画が無かったが自主的に動いた。 (3) 災害で思ったこと 災害規模が大きいほど、公助には限界がある。自助・共助の取り組みが重要と感じ、併せて災害時には女性の視点に立った防災・減災が必要と思った。仙台市地域防災リーダーの認定、女性のための防災リーダー養成講座

	を受講し、せんだい女性防災リーダーネットワークを立ち上げ、東日本大震災の教訓と人の命の大切さなどを発信し、人材育成活動をしている。 (4) 各種活動について せんだい女性防災リーダーネットワークの活動は、女性のための防災リーダー終了後に修了生が立ち上げ、5区で活動を行っている。メンバーは町内会役員、学校支援関係者、民生委員、防災士、市職員、SBLのメンバーから成り立っており、イベントや研修会など色々な切り口から楽しくなる防災を学ぶワークショップなどを開催している。女性ならではの視点とリーダーシップを活かした地域防災力を高める活動を意識している。福住町の防火・防災訓練では、災害時の対応、減災を「自分たちの町は自分たちで守る」をモットーに毎年訓練している。15年前から消防署の指導ではなく、福住町独自の企画と運営で、「全員参加型」を目指す防災訓練である。震災後、避難所運例マニュアルにも変化し、避難所は体育館から校舎の2～4階に避難する、避難所運営委員企画員として女性の参画、簡易トイレは7:3で洋式が増えたなど、女性の参画の大切さを示すこともできてきた。 (5) 参加者に伝えたいこと 出来るだけ行政に頼らない地域力を持つこと、地域の災害の歴史を次世代に根気よく伝承していくこと、備えや準備・取り組みをしている事は災害時のリスク削減に繋がること、お祭りやイベントを通じ、顔の見える関係が減災に繋がること、学校の防災教育と地域防災のタイアップが、地域の発展と防災力向上に繋がっていくことを伝えたい。防災・減災を進めていくには工夫と努力と知恵が必要だ。自分の命を守るため、大切な家族を守るため継続していれば、災害が起きた時には必ず役に立つと思っている。  
開催地より	災害にあった地域の沢山の事例や活動内容が分かりやすく解説していただいた。非常に苦勞しながら今でも試行錯誤している状況が伝わってきて、能美市の地域住民も防災体制の必要性を改めて気づかされた。